episode 6　父に、だれかに、守られて…

投稿者　鎌田優子 さま（北海道）

『いつも　だれかが…』
ユッタ・バウアー 作・絵
上田真而子 訳
徳間書店　2002年

「頑張れ！」耳元で聞こえたのは、間違いなく父の声だった。
外国の路上で、たすきがけのバッグを体から剝がされそうになった。
引きずられ揺さぶられ、もうダメだとあきらめかけた時、耳元で昨年亡くなった父の声が聞こえた。
その瞬間、暴漢の力が失せ、走り去る足音が遠くなっていった。通りかかった非番の警察が来たのだった。

*

当時、私は３年間の海外勤務で、父の死に目に会えなかった。
出発の日、家の前で見送ってくれた父が、あっという間に他界してしまうなんて、全く想像していなかった。

１年後の夏、
友人２人と任国外を旅行していた列車の中、１人が、ガイドブックで夕食場所を探していた。
あるレストランの名前を言ったとき、急に胸が重くなり、締め付けられる苦しさに襲われた。
返事をしなきゃと思いながら、苦しくて苦しくて息ができない。
やっと呼吸が落ち着いた時、既に話題は移り、はっきりしないまま駅に着いていた。
私たちは、その場所へ向かって歩いていたのだった。

*

助かった。命も荷物も助かった。
胸の苦しさを味わったとき、何時間も後のこの出来事は、既に決められていたことだったのだろうか。
絵本のように、「行っちゃダメだ。」と、必死で私の身体を揺さぶって止めていたのかも知れない。
父が、この警察を呼んでくれたのだろうか。
私服の青年は、偶然そこを歩いていて悲鳴を聞いたと言ったが、
絵本のように、彼の手を引き背中を押して、私の場所まで猛スピードで連れてきたのかも知れない。

あの声が忘れられない。
お別れもできず、話したいことがいろいろあったはずなのに、遠くにいる私が帰国することを待っていた父。
この間に家を改築して、一緒に住むことを楽しみにしていた父に、私は何もできなかった。それなのに。
この本を読むたびに、いつも深く感謝する。自分では気付かない、ただ偶然にうまくいったかのような出来事が、
誰かに守られていたからかも知れないと考えさせてくれる。

「絵本の日アワードin FUKUOKA 2021」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

今なお入手可能な19世紀の絵本

絵本作家Jutta Bauer（ユッタ・バウアー）は、絵本の起源としてイギリスとともに説かれているドイツの、ハンブルク生まれの女性です。

時代は19世紀、1845年に初版が発行された『もじゃもじゃペーター』は、2023年の今なお、日本語訳を新刊購入できるドイツの傑作古絵本です。作者は、精神科医のハインリッヒ・ホフマン博士で、1844年のクリスマスに、息子のために作ったお話が、出版者カール・F・レーニングの眼にとまったことで、世紀を超える不朽の名作となったのです。

この『もじゃもじゃペーター』（ほるぷ出版）の誕生より実に一世紀を経た1955年生まれのバウアー氏は、ドイツで戦後生まれの絵本作家として注目を集めています。

一見の価値あり！ ユッタ・バウアー作品

ドイツで最も重要な賞に、ドイツ児童文学賞がありますが、2009年、ユッタ・バウアー氏の全作品に対してこの賞が授与されました。続く2010年には、「小さなノーベル賞」と呼ばれ、国際児童文学の中でも権威があるとされる国際アンデルセン賞画家賞を受賞します。

国際アンデルセン賞は国際児童図書評議会（IBBY）が、その活動理念である「子どもの本を通して国際理解を深める」を形にして1956年に創設した、子どもの本の質の向上に大きく貢献している賞です。本賞は、児童文学界に多大な功績があり、かつ存命している作家および画家の全業績を対象としています。

国際アンデルセン賞選考委員会はバウアー氏の受賞について、「現実的な毎日と伝説を絵の中で融合させた力強い語り手として評価します。アプローチ、独創性、創造性に加え、若い読者とのコミュニケーション能力は素晴らしいものです」とコメントしています。

つまり、ドイツ児童文学賞と、IBBY国際アンデルセン賞において、その全作品と業績が高く評価されたユッタ・バウアー氏は、現代ドイツを代表する絵本作家のひとりとして、ハインリッヒ・ホフマンに続く絵本史に、その名を刻んでいるというわけです。

絵本作家の人となりを知ると…

バウアー氏は絵本制作において、「個人的な体験や生きることを観察して得たものを、大人向けであれ、子ども向けであれ、作品に織り込むことは、一度もマイナスに作用していない」と自己分析しています。その理由を、バウアー氏の経歴にみることができます。

大学進学までの間、看護師助手として身体に障がいをもつ人々の施設で働き、のちにベビーシッターや病院の用務員も経験した奉仕の人であり、その後、ハンブルグの芸術大学でイラストレーションを学ぶ傍ら、学生抗議運動に参加し、カリカチュアリストとしてペンを武器にした体験も持ち合わせた表現者でもあります。

これらの経歴と、先の発言を念頭にして作品を鑑賞すると、一冊一冊に深みが増すのです。

大人の課題絵本にします！

2001年にドイツで初版が発行された『OPAS ENGEL』（原題）も、「現実的な毎日と伝説が融合」された「若い読者とのコミュニケーション能力」に優れたお話となっています。

この原題を直訳すると『おじいちゃんの天使』となるところ、訳者の上田真而子氏と徳間書店の編集者・上村令氏は頭をひねった末に、『いつも だれかが…』と付けたのです。このタイトルから読み始める子どもたちの、夢と想像が膨らむ前向きで楽しいお話は、若い読者に留まらず、人生経験豊富な大人に訴える別の力があるのです。

文字にはされていない歴史を絵が語り、力強く問いかけてくる秀逸な一冊です。

文献

1）マライレ・エートケン：ユッタ・バウアーの肖像，Bookbird Japan（ブックバード日本版）（4），pp.8-11，2010.

2）上村 令：『いつも だれかが…』，徳間書店HP https://www.tokuma.jp/news/n43637.html 2021/9/28